

20. 診断が困難であった上部胆管癌の1例

鈴木 裕 (慈恵医大柏・外科)

原発性硬化性胆管炎(以下PSC)は欧米では、比較的多くの症例をみるも、本邦では約100例の報告があるにすぎない希有の疾患である。また、一般に浸潤型胆管癌(以下CCC)とPSCとの鑑別に難渋することがあるといわれている。今回、われわれは臨床症状、画像診断とりわけ直接胆道造影および開腹術による術中所見、肝性検による病理学的検討を加えPSCと診断したが術後約10か月できわめて高度の胆汁うっ滞を呈したのち、剖検よりCCCと判明した症例を経験したので報告する。

21. 胆道癌長期生存症例の検討

田中信孝, 登 政和
(旭中央・外科)

昭和49年4月～平成元年3月の15年間に手術施行した乳頭部癌を除く胆道癌症例のうち、3年以上無再発とみなされた20症例を対象として検討した。胆嚢癌は切除率74%、3年無再発生存率50%、胆管癌は切除率88%、3年無再発生存率33%であった。胆嚢癌最長生存率は18年で、ポリープ型、深達度pmである。術後3年以降に再発の確認された5例と、未だ再発徴候のない8例との比較で、pn(-), binf(-), ew(-)が胆嚢癌無再発長期生存の必要条件と考えられた。胆管癌の最長生存は10年4か月で、吻合部再発で死亡した。長期無再発生存にはv(-), n(-)が必要と考えられた。再発時期の検討よ

り、リンパ節廓清、遠隔時補助療法のあり方が今後の課題といえよう。

22. 肝門部胆管癌における尾状葉合併切除の意義

外川 明, 宮崎 勝, 伊藤 博
海 保 隆, 安藤克彦, 安藤 聡
安田 典夫, 大多和哲, 尾形 章
林 伸 一, 郷地英二, 清水宏明
高西喜重朗, 永井基樹, 大塚将之
中島 伸之 (千大・一外)

肝門部胆管癌切除例45例を検討した。38例に何らかの尾状葉切除を行い、その内訳は左葉切除16例、右葉切除10例、右三区域切除5例、中央二区域切除1例、尾状葉切除16例であった。門脈切除再建例14例、残肝の肝動脈切除例5例、うち3例再建した。治癒切除は5例11%、相対非治癒切除(ew1)は28例62%であり、両者合わせた根治例は33例73%を占めていた。尾状葉浸潤は14例37%に認め、h-inf型11例、b-inf型3例、metastatic型2例であった。尾状葉切除を含む肝切除例の5年生存率は35%であった。肝門部胆管癌の尾状葉浸潤は約40%に認められ、詳細な術前診断を行い、必要十分な切除範囲を決定することが重要と思われた。

〔特別講演〕

肝内結石症成因に関する一考察

小林展章 (愛媛大・一外)